

## バトラー博士のご逝去を悼む

## 横田安宏

Yasubiro Yokota

日本高齢者生活協同組合連合会顧問

あの元気でさわやかなバトラー先生が逝ってしまった。未だに信じられない。老年学の先駆的な哲人・バトラー博士は単に高齢化問題の理論の開陳に止まらず、元気な高齢者がいつ迄も元気に幸せに過ごす実例を自身で示してくれるものと信じていた。人間一寸先は闇である。

国際長寿センターは日米で1990年にスタートし、その数年後にフランスとイギリスが参加した。私は1992年1月から国際長寿センターの2代目事務局長として関与、公私の事情により、本人も予想外の9年3か月の在任となった。私自身は英語が苦手で、その上高齢化問題の何たるかも深く知らぬままこの世界に飛び込んだ損保会社の営業マンで、関係する皆さんに大いに心配と迷惑をかけた。

そんな時優しく手を差し伸べてくれたバトラー先生の想い出は枚挙に遑がないが、その最初

の出来事は1993年7月ハンガリーのブダペストで開催された第15回国際老年学会である。バトラー博士の提唱で分科会が開催されて、日米のほかにはフランスとマルタが参加した。

もちろん軸は米国で、バトラー先生は席上自分の永年の主張であった「長寿が社会に与えるインパクト」を各国の学者・ジャーナリスト・政策立案者などで比較研究し交流するための国際的なネットワークの重要性を強くアピールした。具体的には3年前にできた日米の国際長寿センターの活動を現在進行中のプロジェクトを中心に説明し、世界へアピールした。その結果フランスが2年半後第3番目のセンターとして加入することになる。さらに国際舞台に初参加の日本

1993年、ブダペストにおける第15回国際老年学会での博士(左から2人目)と筆者(左端)、マルタのグレッグ博士(右から2人目)、フランスのフォレット博士



センターは、バトラー先生の話に沿ってフォローすることで役割を果たすことができ、ほっとしたことを、今でも思い出す。

次に国際舞台でのバトラー先生の活躍に救われた事例でその最大の思い出は、1993年10月28日・29日にワシントンで開催された第1回「高齢化に関する日米合同委員会」に参加した時のことである。当初日本センターの伊部英男理事長が当然のことながら9人の正式委員の1人として参加する予定であったが、持病が悪化し米



ILC年次総会(東京)での博士(右端)と筆者(中央)



1992年、ニューヨークヤンキースタジアムでの博士(左端)、筆者(左から2人目)、伊部理事長。前列はマーナ・ルイス夫人

国出張の許可が下りなくなり、小生が急遽伊部先生の代役を務めることになった。

伊部先生はかねて、高齢化社会における日米国民の価値観の継承について意識調査をしたいと考えて、バトラー博士の賛同も得ていた。伊部・バトラー両氏は日米国際長寿センターの理事長であり、両国の高齢化問題の権威が第1回の合同委員会でこの腹案を一挙に決定しようと考えた矢先の伊部先生の欠席で、バトラー先生も大いに困惑した。

日本の総代表は古川貞二郎厚生事務次官で(その後8年7か月政府の内閣官房副長官) 私は伊部先生の考えを忠実に会議で発言するように求められた。バトラー先生はこの肝心の会議に盟友伊部先生が欠席となり心細かったに違いない。私も非力ながら夢中で伊部先生の構想を説明し、発言の度にバトラー先生がフォローしてくれた。その結果最終的には日米の合意が成り、帰国後質問項目を日米ですり合わせて調査が実施された。バトラー先生のお陰で難関を乗り越えられたのだ。

あれから既に17年。当時ニューヨークに勤務してこの会議の準備をしてくれた阿曾沼慎司氏が今は厚生労働事務次官となっていることに、この国際長寿センタープロジェクトの長さや意義とを重ね合わせながら、バトラー先生を追悼している。

でもバトラー先生の逝去は、やっぱり信じ難い出来事だ。